口蓋裂を人工蓋で閉塞する方法の史的研究

本間邦則

口蓋裂を遠藤（一九三七）は臨床的に先天性口蓋裂と後天性口蓋裂とに分類し、後者は梅毒と外傷によるものが多いと述べている。

梅毒は C. Columbus（1446？—1506）がアメリカ大陸を発見した十五世紀末にヨーロッパにもたらせられ、それ以来、全世界にひろがったとされている。梅毒は非常に経過のながい疾患であるが、それによって鼻がくずれ、口蓋に穿孔する人も多かった。人工的に鼻をつくり、口蓋穿孔を塞ぐことを創案したのは A. Paré（1510—1590）と思われる。Paré は口蓋の穿孔部を塞ぐのに海綿を応用して人工口蓋とし、 couvercle と呼んだが、のちに一五七五（天正三）年には obturateur と記載し、これが現在でも学術用語として定着している。この時代の口蓋穿孔を塞ぐ口蓋栓塞子には sponge とか cotton が用いられた。しかし海綿による口蓋栓塞子は、口腔内で海綿が水分を吸収して膨化するために、小さな穿孔を大きくしてしまう欠点があった。

口蓋栓塞子は十世紀には sponge obturator の域を出ず、十八世紀へと移行する。十八世紀に歯科医学が発展し義歯をつくる技術が進歩してくると、それは口蓋栓塞子にも応用されるようになる。近代歯科医学の祖として尊敬されるフランスの Pierre Fauchard（1678—1761）はその著「Le Chirurgien Dentiste, 1728」に義歯と組み合せた機能的な口蓋栓塞子を記述した。またパリの歯科医 Ch. F. Delabare（1787—1862）は軟口蓋部の破裂を弾性ゴムで閉塞し好結果を得たと一八二〇（文政三）年に報告した。十九世紀になり歯列矯正法が発達してくると、矯正装置と人工口蓋とを組み合せて機能的な口蓋栓塞子がつくられるようになってくる。フランクフルトの外科医 Gustav Passavant の咽頭閉塞の生理的機能の研究、ウィーンの言語矯正家 Emil Fröschels の発声法の研究が報告されると、さらに機能的な口蓋栓塞子が考案されるようになった。

このように口蓋裂、口蓋穿孔を補綴的に閉塞する技術は、歯科医学の進歩とともに開発されるところが多かった。しかし十九世紀中期になると、外科手術により口蓋裂、口蓋穿孔を閉鎖することが成功すると、人工口蓋の意義は著しく後退することになる。現在では顎・口腔外科手術によって切除した部分を補塡する顔面・顎補綴の領域が開拓されてきている。

（日本歯科大学新潟歯学部）

一〇〇年目の女医の卵たち

大村敏郎

一八八五年はわが国の公許女医の第一号である荻野吟子（一八五一～一八九七）が登場した年である。女医公許の制度そのものは前年の一八八四年に制定されているので、その百年記念として日本女医会が東京新宿で記念式典を開いたのは一九八四年十一月のことであった。

その席上、順天堂大学の酒井シヅ先生が荻野吟子に関する記念講演をされ、そのあと女医界の活動に貢献した者に対する賞として新しく荻野吟子賞が設けられ、第一回の受賞者として演者の伯母大村ひさゑ（一九〇一～）が選ばれた。

荻野吟子が女医をめざしたのは自分が性病になった時に屈辱に耐えながら治療を受けなければならなかったが、そのような想いをしないですむように、女性が医療を行うことによって不幸な女性達を救おうと考えたからだと伝えら